

イチゴ「熊研い548」の高原地域における夜冷短日処理

○ 榊 祐子
(熊本農研セ高原)

【目的】

本県で育成した促成栽培用イチゴ品種「熊研い548」(商標 ひのしずく)は「とよのか」と比較してポット育苗での頂果房の花芽分化時期が遅い傾向にあり、出蕾・開花時期および収穫開始時期が遅い。そこで、本県高原地域における夜冷短日処理の開始時期および最終追肥時期が開花時期及び収穫開始時期、年内収量などに及ぼす影響について検討を行った。

【材料および方法】

試験は熊本県農業研究センター高原農業研究所(標高543m)で行い、「熊研い548」を供試した。育苗は、10.5cmポットで行い、夜冷短日処理区は処理開始日を2005年8月5日、12日、19日の3水準、最終追肥日を夜冷短日処理開始日から、7日、14日、21日前の3水準に分け、15℃、8時間日長(午前9時出庫、午後5時入庫)で処理し、畦幅120cm、株間25cm、2条植え(栽植密度667株/a)で定植した。対照区は普通ポット育苗とし、最終追肥を8月15日に行い、花芽分化確認後定植した。

試験規模は1区20株(3㎡)2反復とし、頂果房および第一次腋花房の開花日と収量などについて調査を行った。

【結果および考察】

「熊研い548」の花芽分化は、夜冷短日処理によって安定的に促進され、頂果房の出蕾・開花時期は早まり、それにより収穫開始時期の前進化および年内収量の増加が認められた。

花芽分化が確認されたのは、8月5日処理開始区で8月29日、8月12日処理開始区で9月5日、8月19日処理開始区で9月13日となり、処理期間は24日程度であった。最終追肥による花芽分化の違いはほとんどなく、安定していた。処理開始が早いほど、花芽分化も早くなり収穫開始日も前進した。初期一果重は処理開始が遅くなるほど重くなった。

高原地域では、8月5日からの処理が果実肥大はやや劣るものの年内収量が多く適すると考えられる。

第1表 高原地域における夜冷短日処理の効果

処理開始日 (月/日)	最終追肥日 (月/日)	定植日 (月/日)	頂花房			第1次腋花房開花日 (月/日)	年内収量 (kg/a)	初期1果重 (g)
			開花日 (月/日)	開花揃い率 (%)	収穫開始日 (月/日)			
8/ 5	7/ 8(28)	8/29(24)	10/14	100	11/15	12/21	73.1	15.8
8/ 5	7/22(14)	8/29(24)	10/14	100	11/10	12/24	97.7	15.8
8/ 5	7/2 9(7)	8/29(24)	10/15	100	11/10	12/25	85.9	16.5
8/12	7/15(28)	9/ 8(27)	10/21	100	11/25	12/15	41.2	18.6
8/12	7/29(14)	9/ 8(27)	10/21	100	11/25	12/15	41.9	19.3
8/12	8/ 5(7)	9/ 8(27)	10/19	100	11/22	12/15	49.5	21.2
8/19	7/22(28)	9/13(24)	10/31	100	12/ 6	12/16	38.4	24.0
8/19	8/ 5(14)	9/13(24)	10/30	100	12/ 2	12/15	42.0	23.9
8/19	8/1 2(7)	9/13(24)	10/30	100	12/ 2	12/11	42.4	24.0
普通ポット(対照)		9/20	11/15	100	1/ 2	1/ 9	6.9	27.5

注)8/12処理開始区は台風のため定植が3日遅れたが、その他の区は、花芽分化を確認後直ちに定植した。最終追肥日の()は処理開始前日数を、定植日の()は処理日数を示す。開花日および収穫開始日は50%の株で開花あるいは収穫が始まった日。開花揃い率は最初の株が開花した日から15日以内に開花した株の割合。初期1果重は各区の収穫開始から10日以内に収穫した果実の平均。